



中小路市長：今回、戦争と平和をテーマにお話を伺っていきたいと思います。あまんさんどうぞよろしくお願いいたします。

あまんさん：こちらこそよろしくお願いいたします。

市長：あまんさんのお名前は私も子どものころからずっとお聞きしておりましたので、今日こうしてお目にかかれて非常に光栄に思っております。

あまん：ありがとうございます。市長さんが五小の卒業生と聞いてなんだかうれしくなりました。

市長：非常にローカルな話になっておりますが(笑) 子どものころからすごく親しみのあるお名前でありましたし、学校でも色々な絵本が置いてあったのを覚えています。今日はよろしくお願いいたします。

それではさっそくお話をお聞かせいただきたいと思うんですけれども、私もちょうどこの対談の企画をいただいて、あまんさんの絵本を読ませていただきました。

正直に申し上げますと、絵本を読む機会というのは大人になってから中々ありませんので……

あまん：そうですね。ええ、ええ。

市長：久しぶりに読ませていただきました。

今まで数々の作品を書いておられると思いますが、そのベースにあるのは戦争の記憶ですとかご自身の体験ということなのかなと思いますけれども、私たちは、どうしても戦争というのは想像



することしかできない、体験をした訳ではないんですけど、そういう人間からしてみると、戦争の当時っていうのはすごく悲惨なことばかりだったんじゃないかな、という思い込みみたいなものがあるんですけども。

あまん：実際そういうところはいっぱいありますものね。

市長：それでも、あまんさんの作品を読ませていただいていると、もちろん悲惨なことはたくさんあったんだろうけれど、日々の生活の中にはすごく楽しかったものであったり、なにかこう幸せを感じるふとした瞬間があったりっていうものが感じられてですね、逆にそのふとした幸せみたいなものと周りにある戦争というすごく悲惨なものとのコントラストが、より一層戦争ってダメだよ、いけないよねっていう風を感じさせてくれているように受け止めているんです。

当時の思い出でなにかこう、残っておられることとか、楽しかったこととかって覚えておられますか。

戦時中 満州での思い出

あまん：今の子どもたちの暮らしと同じ暮らしをしているわけですから……

市長：そうなんですね。

あまん：そういう中に戦争があって、例えば慰問袋を作るとか、兵隊さんに手紙を書くとか、一生懸命しましたよ。私達が子どものときは、兵隊さんのおかげで暮らしていると教えられました。日本は世界平和のために戦っていると習っていたので、戦争に対して疑問をもったことはありませんでした。女学校（中学）に入学したとき、授業は英語がなくなり、体育の時間に防空壕を掘ったり、貯水池を掘ったり、兵隊さんの軍服の何かを縫ったり、



そういう時間はありましたが、授業はそのままありました。

空襲は二度です。爆弾が埠頭の方に落とされたと聞きました。日本本土での空襲のことは分かりませんでした。

市長：なるほど。やっぱり外地におられると内地の状況とはだいぶ違う状況なんですね。

あまん：ええ、今ならラジオ・テレビ・インターネットなどで分かると思いますけれども……

市長：そういう情報を得るとすれば当時は新聞くらいですか。

あまん：新聞の報道は押さえられていたのではないのでしょうか。

市長：ほかには、人づてに伝わってくるような感じですか？

あまん：そうでしょうね。大人の人たちには伝わっていることもあったでしょう。でも、私は知らなくて、勝つ

と思っていました。例えば「玉砕」って言葉があるんですけど、それは「全滅」という意味だと、戦後になって知りました。

ただ不思議なことに、広島原爆のときは、私たちの女学校では今度の広島に落ちた「新型爆弾」は、黒いものを通して人間を傷つけるから、明日から白っぽい服装をして登校するよという通達がありました。急に白いものと言われても戦時中はありませんから、私は白にピンクの格子模様のブラウスを着て学校に行ったので、恥ずかしくてよく覚えているんです。でも、大阪に帰ってから友達に聞くと、そんなことは言われなかったという返事ばかり…… 外地の大連では何故通達されたのか不思議に思いました。

市長：なるほど。情報の伝わり方がだいぶ今とは異なるところがあるんですね。

あまん：そうですね。ほかに大変な経験といえば匍匐練習でしょうか。

市長：それ学校であるんですか？

あまん：ええ、そうです。

市長：授業で？

あまん：ええ、教練とか武道とかの時間だったと思います。匍匐練習して手榴弾を投げる練習です。

市長：女学校ですよ。

あまん：ええ、女学校です。

市長：女学校でもそういうものがあるんですね。

あまん：ええ、手榴弾を敵の戦車に投げて伏せる…… そういう練習をしました。

市長：でも全然おかしなことではないんですよ、当時は。

あまん：ええ、そうです。一生懸命でした。

市長：それが当たり前のような状況な訳なんですね。

あまん：そうです。爆弾が落ちたら目玉が出て、耳の鼓膜が破裂すると説明され、「爆弾が落ちた」と先生が大声で言われると、目と耳を両手で押さえて全員地面に伏せました。そういう練習をしたんですよ。でもだからといってそればかりしている訳じゃなくて、授業もありましたし休み時間には集まって楽しい歌を歌ったりしました。「月の沙漠」とか「ローレライ」とかですね。

市長：なるほどね。やっぱりすごく生々しいですよ。そういうお話を聞くと。でもそれが日常だったんだと思うし……

あまん：そう、一回だけ銃を撃つ練習をしたことがあります。

市長：それは実物の？



あまん：ええ、でも、とても古いものでした。ソ連が来たときのためだったのでしょうか。当時校長先生のことは大隊長殿って言っていました。

市長：大隊長殿……

あまん：そういう風に子どもたちもみんな軍隊式にしていたのでしょうか。

私が古い鉄砲を撃つのを上手くできないでいるとき、その大隊長殿が来られて手を貸してくださったのと、私が留め金を引っ張ったのが同時に先生の指を挟んでしまいました。その時、「心配しなくても大丈夫。」と言われたのが忘れられません。

市長：それもすごい体験ですよ。今から考えてみると。そのあと敗戦後に引き揚げてこられることになったんですか？

あまん：はい、敗戦から一週間ほどしてソ連兵が南下してきました。南下してきたときにはとても怖い状況でした。私はお下げ髪にしていました。つまり空襲の時髪の毛が長いままだと火が付いたら…

市長：燃えちゃう？

あまん：ええ、それで女学生になってみんな三つ編みになりました。

そして、女の人は危ないから髪を切って短くするようにと伝わってきて、訳も分からないまま短くしました。

敗戦後の暮らし

市長：そうすると、実際に戦争が終わって内地に引き揚げて来られたのはいつになるのでしょうか。

あまん：二冬過ごして帰ってきました。

市長：二冬？しばらくだいぶ経ってから日本に帰ってこられたと。

あまん：そうです。敗戦の年の10月から学校が始まりました。

市長：じゃあずっと学校は行かれていたんですか？

あまん：はい。学校はありましたので、二冬過ごして1947年の3月に引き揚げ船に乗りました。

市長：そうなんです。その学校は日本人ばかりの？

あまん：ええ、そうです。向こうではそれぞれの国の学校があったと思います。

市長：何となくイメージで、敗戦となった8月15日を境に、何か劇的に変わったのかなど想像をするんですけど、必ずしもそうじゃなくて……

あまん：それはやはり、変わることは変わりましたよ。

市長：割と連続的に……？

あまん：そうですね。ソ連軍が満州を南下して大連に進駐した時から、街は大混乱したと思います。うちにもソ連兵が2回入ってきました。私たちは女ばかり祖母と母と叔母と私の四人でした。



それで足音をひそめて二階のテラスに出て、外から鍵を閉め、屋根瓦を這って、向こうは大きな煙突がありますのでその煙突の後ろに四人で隠れました。ソ連兵が色々なものを盗っていききましたよ。

引き揚げ 広島への記憶

あまん：引き揚げのときは二冬過ごした3月でした。私は肺炎を起こしたり、中耳炎の手術をしたりで40度くらい熱がありました。それで病院船に乗るよう医者から言われましたが、親が病院船につけるのは小学生までということで、家族と離れたくありませんから一般の引き揚げ船に乗りました。

それで引き揚げの途中の記憶がほとんどありません。引き揚げ船の船医室のベッドで寝ていました。佐世保に着き、そこから列車に乗って大阪に着き、阪大病院に入院しました。3カ月半の入院のあと府立豊中女学校に転入しました。

ごめんなさい。話を元に戻して…… 佐世保から大阪に向かう列車で、母が起こしてくれた気もしますが、目を覚ましました。列車が広島のパラトホームに止まっていたのです。明け方薄明るくとか、まだ灰色の時間でした。駅に沿ってバラックが並び、人が少し動いていました。そしてその向こうの街は本当に平たく見えました。ぽつんぽつんと黒っぽい建物が建って見えました……

あの風景は忘れられません。



市長：二冬が経った後でもそういうことなんですね。それこそまさに象徴的な風景なのかもしれませんね。

あまん：記憶っていうのは絵みたいにひとつずつ残っていますから……

戦争体験と童話

市長：そういう色々な経験をされたことは、どうなのでしょう、あまんさんは童話作家として本当にたくさんの作品を書かれていますけれど、童話を作家として作り始めたのはいつごろになるのでしょうか。

あまん：それはね、私は童話作家になりたいとは思ってなくて。

市長：たまたま作品を書いていた……？

あまん：元々書くのが好きで。例えば戦時中でも、友達のMさんと童話を書いて交換したりしていました。

市長：なるほど。そのころから文章を書かれていた訳ですね。

あまん：ええ、色々空想して書くのが好きだったんです。

市長：それを少しずつ続けてこられたものが、目にとまり作品になりって言う……

あまん：そう言えるのでしょうか。振り返れば多くの人のおかげでって感じがいたします。

それで、私自身、平和や戦争を書かねばというよりは、自分が書きたいものの中にはどうしても平和と戦争があるという思いなのです。

市長：ある意味すごく幸せな作家人生なのかなという感じがしますよね。書きたいものを書いて、そしてそれが多くの人に取り上げられてということでもんね。

あまん：ありがたいことです。ですから、本や絵本を出して間もないころ、恥ずかしいことに「仕事」っていう感じが……

市長：ほとんどなかった？

あまん：ええ、なかった、足りなかった。……でも今は仕事と思っていますけど。



戦争だけは…

市長：そういう意味で言うと、最初におっしゃったように、必ずしも戦争のこととか平和を伝えたいということよりも、ご自身の体験してこられたことであったり、色々感じられることを作品にしてこられたということなんです。

あまん：そうですね。わたしは真っ逆さまになった教育を受けている世代なのです。つまり「日本は正しく、世界平和のための戦争をしている」ということから、180度転回して、「日本の戦争はひどいことだった」という

教育を受けました。外地で教える先生も大変だったでしょうが、教わる生徒も大変でした。思えば戦争はひとひと寄せていたのでしょうか。そのことをどうしても伝えたい思いはあります。正しい戦争はないんですよね。おかしい言い方かもしれませんが、戦争はどちらも正しい理由があって始まります。始まったらもう取り返しがつかないということです。お互いに「聖戦」で、お互いに殺される前に殺す——それが戦争の一番根本です。これからの方たちは、とにかく戦争だけは始めない英知をもってほしい。最初に童話を書いたきっかけとは言えませんが、私が生きてきた道すじの中で、戦争は始めてはならない、平和を守り続ける力を持ってほしい、ということを強く感じますのでその思いは書かずにいられないのです。遺言みたいに、それだけは思います。

市長：戦争は、気付いたときに起こっているというか……

あまん：それが怖い。

市長：巻き込まれているというか、そういうものだっていうのは振り返ってみると分かるんですけど、その時代にいる人は、意外と気付いていないんですよね。

あまん：はい、そうです。本当にそこだけは、みんな目を見開いて、耳を澄ましてねって思います。

市長：そういう気配というか、感覚を研ぎ澄ましておかないと、気付いた時には手遅れになっているっていうことは、たぶん戦争ってそういうことなんだと思いますね。

あまん：そうですね。だって今地球上で起こっている戦争は、どちらも理由があると主張しているでしょう。

次の世代へ伝える

市長：そうですね。そこは我々も引き継いでいかないといけない。私たちもそういう世代だと思っています。ただやっぱり、戦争が終わって76年目、これから戦争を知らない世代がますます増えてきますよね。

あまん：平和は何にも考えないで続く訳じゃなくて、沢山の方々の力がいらいます。

市長：努力がいるんですよね。

あまん：そうですね。努力ですね。長岡京も平和のための色んなことをしておられるのがとてもありがたいと思います。

市長：記憶を紡いでいくことはすごく大事で、私自身も、祖父が戦争当時は土木の技術屋さんでしたので、ちょうど終戦間際くらいに九州で軍務についていたんですけど、ちょうど長崎に原爆が落ちた日にたまたま向かい側の島原にいたらしくて、向こう側で大きな爆発があったような記憶があるという話を直接聞いたことがあって。そういった体験をした人から直接話を聞ける、私たちは最後くらいの世代ですよ。ですので、これから実体験みたいなものであったり、リアルに伝えていくということが、だんだんと風化していく可能性がありますので、その意味では、あまんさんが書いておられるような作品を通じて、これからの子どもたちが、戦争って怖いよね

とか、ダメだよねっていう実感をもってもらうことはすごく大切なのかなと思います。

あまん：ありがとうございます。

市長：今度は、私たちの世代が次の子どもたちの世代にも繋いでいかないといけないということですね。

そのためにも、まだまだこれからも、あまんさんにはぜひ作品をたくさん送り出していただいて、私たちの世代や子どもたちにもメッセージを伝えていただけたらと思いますので、これからも更なるご活躍をお願いしたいと思います。

若い世代へのメッセージ

市長：最後に、もし何か若い世代の方にメッセージがあればお願いします。

あまん：私は、幼い子ども時代は、この世に生まれたことをよろこぶ人生の祝祭であって欲しいと思っているんです。

それから少しずつ大きくなって、平和のことを、戦争のことを知ってほしい、考えてほしい…… 知っていくのは高校とか大学とか大きくなってからだと思っています。大人になって目を見開き、耳をすましてねと願っています。でも、子どものとき、平和と戦争を全く知らないのではなく、ほんの少



しだけ戦争で亡くなった子どもたちのことを知ってねと思います。今地球の上で泣いている子どもたちが大勢いるのですから。

それで戦争の怖さや悲しさは、雫のように覚えていてねという思いなのです。

市長：自然体というかそういう方がいいかもしれないと思いますし、そのためには絵本とかを通じて、というのが一番子どもたちの胸にストンと落ちるとい部分があると思います。

あまん：ありがとうございます。

市長：ぜひこれからも子どもたちの心にふっと残るような作品をどんどん出していただけたらありがたいと思います。

本日は大変貴重な時間を頂戴しまして、ありがとうございました。